

耕地利用研究会編

『わが国における耕地
利用の現状とその地域性』

(耕地利用研究会・1982年)

622頁・6,000円

栗原 浩*

この度、全国大学付属農場の教育が分担して行った調査「わが国における耕地利用の現状とその地域性」が出版された。本書の内容は、土地利用型の食用作物、果樹、露地野菜（そさい）、工芸作物など、74種の作物を対象に、都道府県別に県内を数地域にわけ、作付順序、作業体系および耕地の生態的維持技術を詳しく調査したもので、地域間の比較ができるように整理してある。

作付順序は、ある作物の前作や後作の組み合わせである。耕地の生態的維持技術は、耕地の生産力を維持する手段で「当分のみでなく、前作、後作を含めた時系列の中で、耕地を長期にわたって健全に維持することを目的とした作業」と定めた。

例えば、最近問題になっている土壌生産力の維持・向上、土壌の保全、病害虫や雑草の生態的防除、防風林による作物の減耗防止などがある。

作付順序や生態的維持技術は、耕地の気象・土壌条件に加えて、そこに生息するすべての生物（作物、雑草、土壌微生物、病害虫）が一つの系を作っている（これを耕地生態系という）ので、系の動きを配慮しながら、実施しなければならない。その方

針は農民たちが先祖伝来、引き継いできたといえる。この内容は総合性、永続性および地域性を持ち、一般には「慣行農法」といわれるが、私は「文化財的技術」と言いたい。

その第一の理由は、文化（カルチャー）の語源は、「耕作する」「栽培する」であり、「民族・種族など一定の人間共同体が、自然または野蠻の状態にとどまることなく、それ自身の特定の生活理想の実現を目指して、徐々に形成してきた生活のしかたと表現」である。作付順序や生態的維持技術は立派な農耕文化であり、食文化とともに宗教、冠婚葬祭などの儀礼、学問、芸術など、文化の根源である。したがって、重要民俗文化財とか埋蔵文化財に比肩されるべきものと思うからである。

第二には、現在の農業技術は科学的思考によって開発されている。文化財的技術は先述のように総合性、永続性、地域性が基本であるが、科学的技術は全く対照的に分析的（個別的）であり、時間も断面的で、普遍的（画一的）現象を取り出そうとしている。

雪の研究で高名な中谷宇吉郎は『科学の方法』の文中に、解ける問題と解けない問題を論じ、「自然現象は非常に複雑なもので、人間の力でその全体をつかむことはできない。ただその複雑なものの中から科学の思考形式にかなった面を抜き出したものが法則である」と述懐している。いみじくも、前半に相当するのが文化財的技術であり、後半が科学的技術と読みかえることもできる。

わが国の耕地利用の現状は、まさに両技術の葛藤（かっとう）としてとらえられる。肥料、農薬、農用資材、除草剤、農用機械の発達・普及は目覚ましく、これを評価するのにやぶさかではない。だが、一方で耕地の汚染、耐性病原菌・害虫の誘発、連作障害の拡大など、耕地生態系の乱れを招き、耕地生産力の永続性が危ぶまれている。

科学的開発技術を農業にあてはめるときに、農業の総合性を知らなかったり、受け入れる農家側も文化財的技術の価値を弊衣のようにながぐりすてる危険性をはらんでいる。農政は、本当は両者の判定者であるべきであろう。ただ今回の耕地利用の実態調査でみる限り、農家の方々が、有機物（稲わら、堆肥＝たいきゅうひ）の確保に並々ならぬ執着が読みとれるのは、せめてもの救いである。また品種改良は作物自体にかかわるので、成り行き上、総合性、継続性、地域性を考え、農業にそれなりの貢献をしている。

今度の調査から各作物の作付順序と作付集約度を解析すると、次の4地帯に地域性を見い出すことができる。

①北海道＝イネ科作物－マメ科作物－根菜類を組合わせた畑輪作体系が特徴の大規模畑作地帯。基幹作物は普通作物と飼料作物で、3年以上の長期輪作体系が広くみられる。イネ科とマメ科の普通作物が地力維持作物となっている。

②東北・関東東山地方＝中規模畑作地帯で、在来のヒエ・ムギ類－ダイズの2年3作型に象徴される普通作物を中心とした畑輪作が、換金性の高い野菜類、工芸作物と置き換えられている。一方では、これらと

普通作物を組合わせた1年2作型も多くみられる。

③近畿地方＝北海道を寒冷地の輪作の典型とすれば暖地の輪作の典型を示している地方。この輪作は水稲と野菜類を組合わせた田畑輪換体系で、3～6年の長期輪作が特徴である。ここでは水稲が地力維持作物で、とくに湛水（たんすい）による耕地生態系維持を図っている。この場合、野菜類が基幹作物となる。

④中部（平地部）・中国・四国・九州地方＝作目に関係なく1年2作型の前後作関係が優占する。自由作体系が輪作体系に比べて相対的に多く、多様な作物を自由に組合わけている。田畑輪換体系もみられるが、輪作年数は少ない。水稲とムギ類、ダイズの1年2作または2年2作の交互作体系が広くみられる。

こうした地域性をつきつめてゆくと、適地適作論につながる。それはさておき、農業技術研究者は、文献に情報を求めると同じ熱意で、耕地利用の実態を周年把握する必要がある。作物が生育する期間のみ調査するのは、実態ではない。また農家に謙虚に学ぶ態度がほしい。それぞれがおかれている所で、地域臭のする研究に取り組むことこそ、地域性を正しくつかんだ課題であり、最も科学的である。

国土は狭いといっても、一方では過疎と高齢化は進み、耕地が放棄されてゆく。そうしたところで黙々と土に親しみ、農業に取り組む人々もいる。農業の将来に理想の火を絶やさないためには、農政、試験研究、生産者の相互理解を深め、相互扶助にまで高めることを期待したい。それには思想的に全く対照的な、文化財的技術と近代

* くりはら ひろし、京都大学農学部

農業技術をどのように調和させて、施策として生かすかにかかってくる。いままで三者がそれぞれの立場を十分理解せずに行動

したことに對する反省があつて、はじめて新しい農業の幕開けとなると信じている。